

Special Essay

寒い学校で思ったこと

医化学講座

佐藤 秀明

12月のある日、久留米市内の小学校を訪ねる機会があった。教室に入って驚いた。皆、上着を着たままで授業を受けているのだ。何か違和感を覚えた。・・・そうだ。もう冬なのに、暖房が無いのだ。東北出身の私でも確かに寒い。そういえば以前に聞いたことがあった。「センター試験の福岡会場では暖房が入らないのだ」と。

私が子供の頃、教室の窓には必ず、ガラスの代わりに直径10cmほどの穴の開いたトタン板が1枚はめてあった。秋の終わりが近づくと教室にストーブが設置され、この穴を煙突が通るのだ。とある田舎の小学校では、コークスを焚くダルマストーブがあった。コークスとは石炭のような燃料である。寒い朝、日直がバケツにコークスと焚き付けを取って来ると、上級生がストーブに火を入れてくれた。日に何度かコークスをくべて焚き続け、掃除の時には溜まった灰をバケツに入れて、雪の積もった校庭の隅へと捨てに行く。冬の日直のちょっと面倒な仕事であった。数年後、大きな都市に転校したら、教室の暖房は石油ストーブになった。いずれにしてもストーブ周辺の席はやたらと暑く、教室の後ろや廊下側は隙間風で寒かった。そのため、毎週ローテーションで席が替わった。席替えは楽しいはずなのだが、目が悪かった私はいつも黒板の前で少々残念だった。ストーブの上には加湿用に大きな金だらいが乗っていて、そのお湯で牛乳を温める奴もいた。たまにパックの底が抜け、教室中が牛乳臭くなることもあったが。

中学校までは石油ストーブだったが、高校と大学では窓際に設置されたスチームヒーターが教室を暖めていた。それだけでちょっぴり大人扱いされた気がした。でも、暖房がスチームに代わっても、室内の空気は対流以外ではほとんど攪拌されなかったので、部屋の中の温度差は相変わらずひどかった。その後、大学で配属になった研究室の古いスチームも、昼間しか働いてくれなかった。夕方からは学生も先生も電気ストーブにあたるか、上着の重ね着で済まずしかなく、使い捨てカイロが必需品であった。その頃に、エコだ、地球温暖化だ、CO₂削減だなどと言っていたかどうか、記憶は定かでない。単なる予算不足だったのかも知れない。

そんなことを思い出しながら、1月、小学生に負けじと研究室のエアコンの設定温度をちょっとだけ下げしてみた。子供の頃ほどではないが、この冬は結構寒い。

